

「良き方を選びたり」

サムエル記上3：1～9

ルカ10：38～42

(1)

主イエスの生涯は、「狐には穴があり、空の鳥には巢があるが、人の子には枕する所がなかった」と言われてきました。ところが、1箇所だけ身も心も安んじて休める場所がありました。いわば、主イエスの「隠れ家」とも言える場所です。それが、マルタ・マリヤ姉妹の住んでいた「ベタニヤの家」です。二人の姉妹のうち、こちらかといえば姉「マルタ」より、妹の「マリヤ」のほうが好意的に受け取られてきたようです。

横浜の山手に、「マリヤ修道会」があります。しかし、「マルタ修道会」は耳にしたことがありません。また、教会の婦人会の名称に「マリヤ会」はありますが、「マルタ会」は聞いたことがありません。それほど、妹マリヤは多くの女性から慕われてきました。しかし、このままで二人の間に、評価の違いが生じたのは、おそらく、ルカ10章38節から42節の箇所にあると思われる。ルカ福音書10章38節に、「マルタという女が喜んで、主イエスを家にお迎えした」ということから、主イエスがベタニヤの家を訪れたのはその日に限られたことはいえず、どうもベタニヤの家をしばしば訪れていた節があります。

しかも、主イエスが「ベタニヤの家」を訪

れた時、二人の姉妹の対応の仕方は対照的でした。姉マルタは、主イエスのために、かいたいしく接待の準備をしていたようですが、妹マリヤは、側について手伝っていた様子がありません。まさに「こを見る限り二人は対照的です。」としたことから、何時しかマルタのタイプとか、マリヤのタイプという言葉が生まれました。

お姉さんのマルタは、「お・も・て・な・し」「上手ー、手も八丁・口も八丁、何をするのも素早く、そんなく家事をこなすタイプの女性」と言えば、妹のマリヤは、内向的で、もの静かな、瞑想的な女性とのように受け取られてきました。

確かに、人にはもって生まれたタイプというものがあるようです。このままで二人の間に違いが生じたのは、わたしたちの気づいていない「ベタニヤの家」の特殊な家庭事情があったようです。実は、「ベタニヤの家」には、もう一人、病弱な弟「ラザロ」がいました。ヨハネ11章をみますと、弟ラザロは生死の淵をさまざまっています。この病弱な「ラザロ」の世話をしながら家庭のやりくりをしていたのが姉のマルタでした。

他人がうかがい知ることのない、さまざまに家庭内の事情があります。そのことに気づかないで、ああだ、こうだと他人は口をはさみます。弟ラザロの病気がいかなる病かは分かりません。しかし、病人をかかえてい

る家庭の苦勞は計り知れませぬ。

どうもそれだけではなからうと云ふ。

妹マリヤもまた、丈夫な身体でない様子が伺えます。ヨハネ一章の節以下には、主イエスがおいでになった時、すなはちま出迎えたのは姉のマルタですが、妹マリアはその時「家の奥に座っていた」のです。どうしてな、妹マリアの動機に鈍感を感じます。それが、ルカイ一章のお話でも、主イエスがいらしてゐるのを知りながら、妹マリアは姉マルタと一緒に出迎えてゐませぬ。

こつたことから、主イエスの足元に座つてみ言葉に聞き入っていた妹マリヤを信仰的な女性と見なし、姉マルタをただ接待に心配のをしてゐた女性とでも見なしてゐたとすれば、これは大変な誤りです。

(2)

ルカイ一章4節には、「しかし、どうしても必要なことはわすかです。いや、一つだけです。マリヤはその良いほうを選んだのです。彼女からそれを取り上げてはいけません」と主イエスから最大級のお褒めの言葉をいただいたのはマリヤでしたが、ヨハネ一章2節には、「主に香油をぬり、自分の髪の毛で、主の足をふいた女」は、実は姉マルタであり、さらに、弟ラザロが死んだ後、墓の前で悲しみ沈んでいた時、主イエスから声をかけられ、「わたしは、甦りであり、いのちである。わたしを信じる者は、死なで

ません。あなたは」のこゝを信じますか」と問われた時、マルタは、「はい。主、信じます。あなたは世に來られた神の子キリストである」と信じております」と感答して、告白したのは姉マルタなのです。

「おもつて」の「ギキツヤ語」ティマ「マ」は「は」「奉仕」と訳されます。こゝをほどまで「細やかな心配のをしてゐた姉マルタが低く見られて、」主の足もとに「すわつて、みこつた」に聞き入つた「マリアが最善・最良・最高の評価をわけてゐる」だから、おかしなこゝはなからうと云ひか。

姉マルタは、今宵わが家にお泊まりくださる主イエスのため、せめて、皿一枚なのも多くの料理をお出ししたいと心を込めて甲斐甲斐しく働いてゐたのです。「マルタ」という名前は、いみじくも「女主人」という意味です。問題なのは、そのこゝで「忙しか」立ち回つてゐた姉マルタが「しかしか、」気が落ち着かなくなった。「心をとりみだして」(口語訳)、「ついに、妹マリヤに対して「ライラが高じ、果てには、主イエスにまで不満を口にしたのです。」

何故、マルタはそれほどまで心を取り乱したのでしょうか。それは、多分にマリヤに原因があったと思われまふ。いくら身体が弱いとはいへ、少しは、気を利かして、せめて皿一枚なりともテーブルに並べるだけの手伝いは出来たはずですよ。

それが、マリアといへば、主イエスが、我が





うではありませんか。気を付けねばなりません。」良きかたは何か「一、霊的敏感さを養わねばなりません。」

日本政府は、東京五輪開催を、なんとしてでもすすめるつもりです。「」トーマス・キャンペン」の再開のタイムミンクを聞いています。医療の現場は大変な状況です。いまや悪性「コロナの影響は全世界に及んでいます。」じつじつと最悪な状況の中でも、主イエスは「じつじつと必要なのはわずかで、す」「良きかたを選び取る「知恵と賢みの必要を促してきます。」

サムエル記3章には「主が来て、サムエルのそばに立ち、『サムエル、サムエル』と呼ばれた。サムエルは『お話しください。しもべは聞いておきます』と言った」①サムエル3：10「」は極めて印象的な聖書箇所です。

「士師記」「ルツ記」「サムエル記」と続くサムエルの時代は、神の黙示、神の御言が途絶えて、霊的に暗い最低の時期でした。

「しもべは聞いております」「は」「しもべは聞いていますから」「ともあります。すなわち、主が、何をどう語られるのかを耳をそばだてて聞かねばならない時が差し迫っていました。その時、わらべ「サムエル」が選ばれました。

「右手に聖書・左手に新聞」と語ったのはイスの神学者バルトです。新聞やテレビやインターネットも、この自然界も、人の社会

話も全て、神がわたしに語りかけていることを聴き取るために神が備えておられる手段ではないかと思われれます。

ローマ書10章17節には、「実に、信仰は聞かなくては始まるのです」とあります。信仰はキリストの言葉を聞くことから始まります。忙しければ、いえ、忙しいほど、何にもまして主イエスの前に座して御言葉を聴く姿勢を整えなければなりません。自分に何が求められているかを御言から聞きとる、わび、許されれば、聴いたみ言葉を信仰の仲間と分かち合う機会を大切にしたいものです。そのとき、必ず、日々の生活は豊かに祝福されます。

【祈ります】

天のお父さま、「マコトヤはその良いほうを選んでください。彼女からそれを取り上げてはいけません」と主イエスは言われました。良き方を優先すべきであることを知りながら、自分の必要を優先するわたちです。願わくは、いつも「良き方を選び賢みと知恵をたまわりますように。主イエスの御名による祈ります。」アーメン」